



W2 - Resumos em Japonês - Abstracts in Japanese

非公式発表 Y1

Y1 - サイ研究と神経科学：簡潔な提示

概要

神経科学—すなわちニューロンの科学—が対象としているのは、異なる水準（分子、細胞、組織または統合的、認知的そして行動的な水準）における神経システム研究に関する知識の学際領域の範囲である。神経科学の目的は、我々がいかに考え、感じ、思い出すのかといった心の働きを理解することにある。サイ研究は、学術的であり科学的な研究で、人間と環境（他の人間や生物を含む）との間の超感覚運動的な相互作用に関する研究である。このような相互作用は、超常的と考えられており、かつてそれらは現在の科学的変数では説明しえないものとされてきた。こうした相互作用は、テレパシー、予知、物理的生物学的システムへの遠隔心理の影響としてのサイ現象の存在にとって有利となる強力な証拠を示す、事例研究、調査そして実験研究が同時になされることで、これらを通して科学的に評価されてきた。神経科学とサイ研究の間の関連性は、生理学的変数を考える際にサイ研究の必要性に起因して生じたのだが、超常的な相互作用の存在の証拠をたまたま提供できただけでなく、偶然にもそれらを理解するに至った。生理学的変数がサイ研究で用いられるのは、次のためである。(a)心的過程をさらに調べるため、(b)無意識的過程を測定するため、(c)異なる心の状態を検知するため、(d)サイの生理的メカニズムを発見するため、(e)フィードバックを通じた生理過程の調整を訓練するため、である。本論文の意図は、この領域の文献を紹介して評価することではない。実験研究のみを考えて、サイ研究と神経科学の間のなんらかのつながりに関する、歴史的、及び現時点での文献の（簡便的な）サンプルが提示される。

論文 T01 - T15

T01 - 超常現象信奉と科学的教育

要旨

最近、公立学校における宗教教育の問題が論争されている。この議論で超常現象信奉も扱われることと、また賛成者がその科学的妥当性と教育的重要性を主張すること（反対者がそれに反対すること）から、本問題との関係性を明らかにするのに適切と考えられた。この研究は上記の議論を決着させようというわけではない。この研究は、信奉者の認知能力についての文献と、超常現象信奉の受容または拒絶における教育過程の影響を検討する。研究の結果、超常現象の存在を主張する人の知能は劣っているという仮説は支持されず、またそういった信念や経験がその個人の人生で特に心理力学的・認知的に機能するという仮説も支持されないとされた。研究結果は、かなり知的レベルが高かったとしても、それは、その人が超常的体験をしたり、特定の超常現象信奉を持つ可能性とは関係がないことを示唆している。若干の研究者が、高校・大学での科学教育が超常現象信奉を払拭する手段になるだろうと論じた。しかし、それは超常現象信奉を減らすことを直接の目的とした教育プログラムがなされたときのみ起こるという証拠がある。我々は、この問題のありうる倫理的・科学的帰結について若干の考察を示す。

キーワード：超常現象信奉、科学的教育、認知能力、教育過程、宗教教育

T02 - EPRパラドックスとサイコンと意識

要旨

この論文は、Gödel / Wittgenstein (PUC-RJ / IME, 1974) によって開発されたスピン形式システムを使った数学的方法で、サイ現象の理解をより深めることを目的とする。心理現象の起源と思われるサイ現象を理解するには、数理物理学的精神力学の知識が必須と考えられている。「心—意識」は、「現実」という概念や意味を作ったり、感覚世界の表象である善悪の観念が確かにあることを理解したりする。この「心—意識」の統語的記述としてのサイコンを使うことで、アインシュタイン・ポドロスキー・ローゼン (EPR) のパラドックスが必然的に解消される。EPRは、量子の不確定性と一般・特殊相対論の局所実在性との間で起こる仮想パラドックス実験であり、量子結合があると局所実在性が破られるように見えるというものである。サイコン波は4次元面上の複雑な波動関数で、量子通信の性質や不確定性を減らす性質があり、虚の質量で表されるサイコン粒子は、統語的に、あるいは仮数部として表される。なお、この論文では触れないが、サイコン波は時空の一般ローレンツ変換が可能であり、超光速だけでなくどんな速度でも移動できるだろう。サイコンをサイ現象に適用すれば、4次元における物体の生成・変化・離合集散としてESPとPKを表せるとされる。心理学的には、サイコンはラカン学派の心理分析やフロイトの無意識において重要かもしれない。一般に、サイ現象は無意識である。本論文の場合で言うなら、サイ現象は、サイコンの数理物理学形式を使って無意識がわかりやすい形で出現したもの、あるいはラカン学派の流儀に従うなら、サイ現象はサイの産物の社会的受容と機能的制御のための道具になりうるもの、となる。

キーワード：サイコン、無意識、サイ、物質、相対性、不確定性

T03 - 超常感覚：霊媒体験の現象論的・精神力学的側面

要旨

はじめに：近年の研究の重要な成果は、宗教的解釈や内的サイ現象という解釈から外れて、社会心理的現象として霊媒性が確立されたことである。解離という点以外も考慮すれば、文化現象と解離のような心理生理現象との相関の分析という方法が導かれる。しかし、そういった相関の研究は、まだ全体の輪郭を明らかにしようという段階である。

目的：本研究は、サンパウロ大学の心理学研究所で行っている社会心理学の修士課程の研究から、関連した問題を見出そうというものである。まだ修士論文の作成途中ではあるが、その目的は、精神霊媒の形成における超常的体験と超常現象信奉の意味と



その利用の調査である。本論文の目的は、研究の予備の結果を、特に霊媒体験の精神力学と現象論について要約することである。

方法：被験者は18歳以上のスピリティズム系宗教の信者11名で、少なくとも週に1回は宗教実践に参加している。宗教実践には霊媒体験や霊媒的絵画描画・スピリチュアルヒーリング・体脱体験などの関連体験が、超常現象信奉の要素として含まれている。質的研究は、面接、民俗学的材料、自動書記・自動描画の分析に基づいて行われた。

評価：試用した分析観点には、霊媒性の始まり、体験の種類、活動中の意識状態と体験内容、が含まれていた。著者は、信奉一経験間のフィードバックモデルを提唱する。そのモデルでは、体験の形成においては、集団の影響があると同時に、霊媒のお告げの情動的・無意識的な面への解釈も起こる。著者は、これまでに判明した研究の限界と将来展望、また社会心理学におけるこの問題の重要性を指摘して、結論する。

キーワード：霊媒性、現象論、精神力学、社会心理、特異体験、スピリティズム

T04 - 特異体験について：面接のための若干の方法論的ガイドライン

要旨

はじめに：様々な種類の特異体験の特徴を調べる際に、よく使われる方法として面接法がある。しかし、その実施方法の話題は、文献的・技術的な問題が大きいため、めったに取り上げられない。

目的：この論文は、文献ではあまり触れられていない方法論の常識的な部分と、特異現象研究における特殊な技術を取り上げることとを目的として、心理学や社会科学で特異体験を研究する際の面接法の特徴を議論する。

方法：本論文は理論的研究であり、文献のレビューと特異現象研究における面接実施のギャップについて検討する。

考察：病的偏見、偏見、内的サイ現象による強調、経験の現れとしての他者認識、面接者の主観性への挑戦、面接者の姿勢、社会的役割、面接の準備、記憶のダイナミズム、経験の源への回帰、予測できない困難の問題などを検討する。

結論：面接は、多様な特異体験を調査する主要な方法かもしれないと結論される。したがって、無批判な面接法の応用の代わりに、主観的・客観的アーティファクトを区別しつつ、特異現象固有の複雑性を考察するべきである。

キーワード：方法論、面接法、特異体験、主観性

T05 - 死後生存の研究：方法論的・認識論的考察

要旨

若干の研究者が、実験、あるいは事例研究によって死後生存仮説の検証を追求している。そういった研究から判明した事柄に基づいて、最近の死後生存研究は、今や研究室で行うものへと移行されようとしている。研究室からデータ収集における信頼性の判断基準がいろいろ提案されると、それが偶発事例のフィールド調査の信頼性向上に適用される、といった循環がある。研究者は、意識の死後存続や心身問題を理解するために死後生存研究は重要だと唱えている。しかし、我々は、最も優れた研究であっても死後生存仮説を提唱するには、すなわち、仮説の科学的確認には程遠いと信じている。発見された証拠に重大な要素があり、それが注目に値することを否定しないまでも、我々は研究者が科学的に対応しなければならない方法論的・概念的課題がたくさんあることも理解している。したがって、我々は将来の研究のために、若干の方法論的提案を行う。

キーワード：死後生存研究、方法論、死後の生、超サイ仮説

T06 - 事例研究：霊媒的絵画描画の社会心理的分析

要旨

宗教と芸術は本来、溶け合い、融合していたが、その性格を今もなお色濃く保っている宗教的体験の1つが、スピリット・ペインティング、あるいは霊媒的絵画描画である。世界中の異なる場所で精神霊媒が主張しているように、この種の宗教経験は、死んだ芸術家が仕事を続ける道具として、ある個人に乗り移って能力を発揮すると特徴づけられる。死んだ芸術家の存在を示すために、いわゆる自動書記の方法で霊媒はその芸術家のスタイルを複製しようとする。この問題について小規模な科学研究が行われたことが知られている。本論文は、ブラジル人霊媒ジャック・アンドラデの描画活動の分析の要約である。2009年にレシフェで開かれた第5回サイ会議で彼は5回実演し、その時の観察と得られた材料から、我々はa)

霊媒が使った描画技法の一般的特徴、b) 主要な絵題や象徴、c)

描画中に霊媒が示した一般的な振る舞い、の3点に注目した。これらの観点から、著者はこの事例の社会心理的分析のモデルを提案する。

キーワード：霊媒的絵画描画、芸術心理学、社会心理学、超常的体験、霊媒性

T07 - ショーペンハウアーと宗教研究：神秘体験研究の哲学的意義

要旨

神秘的体験の報告には、しばしば特別な要素が含まれている。たとえば、「純粋な」あるいは単一の良心の出現、内界と外界あるいは自己と他の物体との識別不能化、時空の非局所性、平安感・至福感・超越感・宇宙との一体感やその他の心慰められる感覚などである。また、多くの場合、宗教的な意味合いで唯一神や神々との遭遇もある。まとめて言うなら、日常生活における合理的・論理的法則のゆるやかな破れが起こる。一般に、神秘的体験は言葉で表現することができず、他人に伝えることがむずかしい。科学研究の対象となる前から、神秘的体験は一連の秘儀や宗教的伝統に吸収されてきた。さらに、神秘体験は常に多くの哲学者の関心の的でもあった。ここでは、神秘主義関連問題に焦点を当てたアルトゥル・ショーペンハウアーの意志・知性・表象の考察を引用する。この論文は、正に、ショーペンハウアーの文献に基づいて、哲学的プリズムの下で宗教的・神秘的体験を理解することを目的とする。著者は、哲学との対話が特異心理学の分野に何らかの概念的・理論的議論を引き起こし、本研究の狭い枠を超えて神秘体験の研究ブームが起こることを期待する。



キーワード: アルトゥル・ショーペンハウアー、神秘体験、宗教的体験、形而上学、サイ研究、学際性

T08 - 夫婦間のテレパシー：探索的研究

要旨

本研究は超常体験（AE）に関する研究であり、アメリカ心理学会（APA）によれば、超常現象は大多数の人々に体験されているにもかかわらず、普通ではないイレギュラーな経験とされているものである。超常体験とは、通常の経験からの逸脱であり、事実に対する常識的な説明にはそぐわないものである（Cardeña, Lynn & Krippner, 2000）。テレパシーは、誰かの思考、感じ、もしくは行為についての情報を超感覚的方法によって得る能力として定義される（Rhine, 1965）。たいていの場合、感情的に近い人たちを巻き込む同時的テレパシーの事例を考慮し（Irwin & Watt, 2007）、本研究は夫婦を被験者とした。この研究の一般的な目的は、夫婦の間において、彼らの日々の日常環境（ひとは自宅、もう片方は職場）におけるESPの生起を検証することである。各カップルはテレパシーのテストを受け、お互いは離れて感覚的に隔離された条件に置かれた。得られた得点は評価され、個人データである、気分、動機、仕事、家庭環境（参加者の自己報告に基づく）、そして、結婚の社会化、と結婚の満足（結婚満足尺度を使用した）、との相関がとられた。送信者は自宅で日々の家事をして、あるときになるとターゲットの情報を、職場にいる受信者に向けて、“送る”ように求められる。受信者は、自分がテレパシー的情報を受け取っていると感じた時はいつでも、それについてメモを取るようにする。ターゲットは、A4シートにプリントされたイメージを構成する。画像は、8つの優勢な色（可視スペクトルの7色と、黒と白からなる灰色の陰影）の陰影をつけるために、Corelフォトペイントで編集された。ターゲットのセットはどれも、12の画像を含み、それらの4つは優勢色をくり返す。画像は互いに異なるように準備され、職場のプリンターで印刷される。実験スコアが評定される：(a) 4つのブラインド判定によるペアリング、と (b) 一時的なシンクロシティの検証（研究者は、送信の期間と情報の受信を比べる）。

キーワード: 超常体験、テレパシー、夫婦の満足

T09 - ヒーラー近傍の見えない力の空間分布 - キュウリを生体センサとして使ったガス測定法の応用 -

要旨

白いぼキュウリ（*Cucumis sativus* 'white spin type'）

を生体センサとして使うガス測定法にて、ヒーリング中のヒーラーの周囲に広がるヒーリングパワーのポテンシャルの空間分布（X-Y平面）の測定を試みた。ヒーラーは特異能力者として知られるW003（女、41歳）。ヒーラーは座位にて、高さ67cmの机の上に設置されたキュウリ切片（実験試料2皿）に対し、30分間、キュウリの香が強くなるよう非接触で手かざしヒーリングした。さらにヒーラーの周囲のポテンシャル分布を測定するために、ヒーラーの前後左右に50cm間隔で4点ずつ、斜め方向約2.5mの4か所にキュウリ切片を設置した（計20点。いずれも床面から70cm）。ヒーリング試行は15分の休憩をはさんで2回実施した。ヒーリング中、対照試料となるキュウリ切片は別室に保管した（ヒーラーから対照試料までの直線距離は12m）。24時間後、各試料のガス濃度を酢酸エチル検知管141L（ガステック社）で測定し、各点のJ値（実験試料と対照試料のガス濃度の比の自然対数）を求めた。結果、ヒーリング中のヒーラーの周囲にはクーロンポテンシャルとは異なる特異な形のポテンシャルが形成されていること、ヒーラーの体の前後方向と左右方向とで異方性があることが示唆された。

キーワード: ポテンシャル、空間分布、非接触ヒーリング、手かざし、白いぼキュウリ、ガス測定法

T10 - ヒト大脳新皮質に対する低強度磁場刺激

要旨

はじめに：本研究はクリチバ市の統合的スピリティスト大学（FIES）

の実験室で実行の予定である。この論文は、ヒト大脳新皮質への低強度磁場刺激が普通ではない超常的体験や宗教的体験を引き起こすかどうかを調べる研究計画に関するものである。

目的: 磁気刺激用ヘルメットには、頭部両側の側頭葉に4個ずつ、計8個のソレノイド電磁石がある。電磁石は最大0.0001 Tの磁場を発生できる。類似の実験と同様に10 nT~10

μTの範囲で磁場刺激を与え、8名のボランティアが「霊体の存在を感じる」などの「普通でない体験」をするかどうかを調べる。

実験協力者: 性別不問で、18~60歳のボランティア8名とする。

方法: 8名のボランティアはFIESの学生から面接によって選抜する。実験協力者はそれぞれ20分ずつヘルメットを使用し、本論文の著者が質問紙調査を行う。実験前に医師が実験協力者の体温、血圧、脈拍を測定し、実験に適しているかどうか調べる。さらに実験後も測定して、実験によって生理変化が生じたかどうかを調べる。

主実験の測定と結果の評価: 評価は実験前・実験中・実験後の各期間に質問紙で行われる。

キーワード: ニューロテオロジー、神ヘルメット、超常的、宗教的体験

T11 - サイの神経生物学への間接的アプローチ：予知と日周リズム

要旨

理論は、松果腺で作られる化学物質は、日周リズムを作るだけでなく、睡眠と夢見の過程で重要かもしれないと示唆している。この化学物質はまた、突発的な神秘的・視覚的状態とサイを仲立ちする上でも重要かもしれない。そういった化学物質の1つ、メラトニンは、夜間、その量がかかなり変動することが知られている。にもかかわらず、メラトニンの最多期（午前3時）が最少期（たとえば午前8時）よりもサイを導きやすいか？という研究は、ほとんど行われていない。この研究の目的は、夜間と朝一番と



で10人の実験協力者を10夜測定することである。強制選択予知課題と自由応答夢予知課題の2種の実験を行うが、特に真夜中と朝を比較したときに、夢予知は強制選択予知よりも良い結果を出す予測される。サイに対する信念、超常的・開放的体験に対する信念など、サイ能力に関係しそうな他の変数も測定される。理論、方法論や実験結果が議論される。

T12 - 臨床専門家の理論的見解における超常的主張の社会的表象

要旨

はじめに：本論文は、特異心理学の分野で社会心理学の修士号（2010）を取得するために行った研究の一部を報告する。偶発的な超常的主張の調査に始まり、今日、特異心理学という形で学術界で確固たる地位を占めるに至るまで、この種の調査は手続き・分析の主要部である概念や調査方法を社会心理学から導入してきた。この論文は、下記の経験的研究で示された社会心理学と特異心理学の間のやりとりを主として取り扱う。

目的：我々の目的は精神医学の姿勢と、予知、念写、臨死体験といった超常的主張についての心理学の、とある理論的見解を検証することである。専門家の回答から、彼らの理論的見解の中に、こういった超常的主張の社会的表象が存在しているかどうかを調べる。

協力者：我々の経験的研究の参加者から38名の専門家が無作為に選ばれ、その中には精神分析学者と、色々な領域の臨床心理学者が含まれていた。彼らは、7名の行動分析家、10名のユング心理学関係者、12名の心理分析家、2名のトランスパーソナル心理学者、7名の精神分析学者であった。

方法：我々は質問1つだけの面接形式によるデータ収集法を使用した。収集された材料は社会表象理論（RS）に従って分析された。社会表象理論では、得られた結果の詳細を明らかにする上で、係留（anchoring）の概念と対象化が重要である。

結果：我々は、トランスパーソナル心理学の専門家において特異現象の社会表象を、また精神分析家では別の形の社会表象を見出した。超常的主張は、質問に対する理論的説明の中に明らかに存在していた。

考察と結論：調査された理論の概念システムでは、主張される超常的現象を適切に理解できず、また理論的に不可能であることも示せなかった。これは、各専門家が、その理論の創始者が超常現象について述べた意見（たとえばフロイトとテレパシー、ユングとスピリティズム）を知らなかったためである。まさに、医者への回答に見出された錨（anchor）は、無知であることを知っているかどうかを明確にさせた。トランスパーソナル心理学は、おそらくその理論的志向性から、超常的主張の研究を網羅する。本研究の結果を証明するか、あるいは否定するためには、新しい研究が必要である。

キーワード：社会心理学、特異心理学、社会表象、精神分析学者

T13 - スピリチュアル体験、超常的要素を持つ精神障害、および現代超常体験との関係の探索的研究、

要旨

はじめに：典型的現代特異体験は未確認飛行物体（UFOs）やその関連現象と関係しており、そこに踏み込むと、しばしば現実に対する見解が根底から覆される。この研究は1997年から2010年に収集されたデータを基にブラジルの複数の州で起こったUFO体験を調査したものである。

目的：

本論文は、メネゼス・ジュニアとモレイラーアルメイダによって提唱された精神健康指標とUFO体験の本質的特徴との適合性を検証することを目的とした探索的研究である。ブラジル人の文化特性、およびブラジルでの研究が欠けているという点から、ブラジル人の体験が対象となった。そして、典型的現代超常体験の領域で病気と超常体験との違いの診断についての議論を拡張するため、現象論的にUFO体験はスピリチュアル体験や超常的要素のある精神障害にどのように近似されるか検討することとした。

協力者：調査対象者は、著者の修士論文のための探索的調査でUFO体験を報告した人とした。研究の質を重視した結果、標本数に上限が設けられた。最初の15人の面接でパターンが明らかになり、30人調査した時点で探索的研究としては十分と判断された。

方法：心理学における現象論的研究の観点から、メネゼスとモレイラーアルメイダの提案するスピリチュアル体験と宗教的内容の精神障害とを区別する9つの基準に基づいて、UFO文献とUFO体験の面接結果の本質的要素を調べた。

評価：体験の評価は、スピリチュアル体験と宗教的内容の精神障害とを区別するためにメネゼス・ジュニアとモレイラーアルメイダによって提案された9つの現象学的基準に基づいた。9つの基準は、心理上の苦悩が無いこと、社会的・職業的に問題が無いこと、体験の持続時間が短いこと、体験の客観的事実に対する批判的態度、文化的または宗教的主流グループとの適合性、依存症が無いこと、その体験を制御できること、長期にわたる人格の成長、他人を助けようとする態度である。

結果：UFOの逸話、特に非常に複雑なもの、は重要な局面で不安障害、精神病患者、解離体験と共通する傾向があり、その3点は他の項目とはっきり区別できるように思われた。

考察と結論：理論的・臨床的・倫理的な意味が検討された。結果は、サイと死後生存仮説に関連する体験について存在論的・現象論的議論が可能であることも示した。さらに研究する必要はあるが、UFO体験は、他の超常体験や精神病理学的体験とは部分的に異なった、特定の主観的体験であると結論された。

キーワード：精神病理学、正常性、超常体験、現象論、UFO

T14 - 解離、宗教、精神的健康：サント・ダイミとウンバンダの研究展望

要旨

初めに：この研究は、精神的健康、精神病理学、および宗教的文脈における変性意識状態の理解に役立てることを目的とする。この研究は12カ月にわたって実施し、典型的ブラジル宗教であるサント・ダイミとウンバンダへの帰依者・初心者・脱落者において、精神的健康の増進がありうるかどうかを観察する。サント・ダイミは聖なる飲み物アヤワスカを使う宗教で、ウンバンダは変性意識状態の実践を基にする宗教である。



目的: 若干の解離性障害の可能性を含む心理的苦悩の回復・緩和・悪化、および主観的健康体験とスピリチュアルな健康に対して、各宗教による社会支援がどう影響するかを比較・検証する。

方法: 質的側面と量的側面の2側面を組み合わせた方法とする。質的方法: 現象論的に解離現象を観察。実験協力者のうちの若干名は、質の高い神秘的体験をした者が選ばれる。一般的な量的方法: 諸指標のうち、変化するものを調べる。評価の縦軸は、認知心理学的なものとしてブラジル版の異文化性指標、友愛性質問紙、霊媒・宗教体験質問紙を用いる。12ヶ月後にも調査を行う。実験協力者は延べ90名である。第1群はサント・ダイミとウンバンダの帰依者各15名(計30名)、第2群は初心者各15名(計30名)、第3群は30名の対照群である。実験期間中に脱落した者が出た場合は第4群として扱う。不測の事態があるので、各群とも5名以上多めに対象者とする。

除外基準: 研究に影響しそうな精神病や他の病気の治療歴のある者、未成年者は対象外とする。なお、研究手順の詳細は事前に同意書に記載される。

キーワード: アヤワスカ、解離、宗教、精神的健康、サント・ダイミ、ウンバンダ

T15 - 現代超常体験の心理社会的影響: ブラジル人集団におけるビッグ・ファイブ性格特性、心の知能、精神病理学的根拠

要旨

はじめに: 本論文はサンパウロ大学心理学研究所で行っている修士課程の研究計画を扱う。簡便のため、1997年から収集されているデータに基づき、ブラジル人のUFO体験を調査する。

目的: この計画は、UFOという超常体験をしたと主張する人とそうでない人とを、ビッグ・ファイブ性格特性、心の知能、精神病理学的指標で比較研究するものである。調査結果は、サイ体験と死後生存仮説についての存在論的・現象論的議論も可能にする。

被験者: 対象者は5群に分けられた150名で、UFO体験をしたと主張する人々である。彼らは市民組織によってUFO体験者として記録されており、以前、筆頭研究者によって面接が行われた人の中から選ばれた。対照群として30名が会社と農村地区から集められた。

方法: 面接助手と、ブラジル人向けに改編された定量テストが使われた。歴史的・文化的・臨床的・科学的次元において、調査結果の社会心理的影響が検討された。

評価: 本研究は質的かつ量的研究である。心理評価の結果は仮説の検証を可能とする。面接と量的解析から、量的結果が社会心理学的動力学の要素として意味づけられる。

キーワード: 超常体験、性格、心の知能、精神病理学、社会心理、UFO

招待講演者 P1 - P3

P01 - 霊媒体験の神経生物学

要旨

世界の67%の人が死後生存というものを信じており、その中には、トランスや霊媒が現世と来世の懸け橋になるという可能性も含まれている。トランスや霊媒は歴史上、多くの社会で広く見受けられる体験であり、託宣者・預言者・シャーマンらによってもたらされ、西欧社会の文化的基盤であるギリシア、ローマ、ユダヤ・キリスト教のルーツの一部となっている。ブラジルではスピリティズムの伝統が幅広く受け入れられているにも関わらず、欧米と同様に霊媒実践は心の病だと軽んじられてきた。それにも関わらず、トランス体験と霊媒体験の研究は心と体の関係を理解する上では無視できない。トランスや霊媒という、ヒトの体験の中でも非常に重要な一面を理解するには、異なる視点や異なる評価法が絶対必要である。こういった体験は社会力学的に普通の事柄かもしれないとする見解や、異文化精神医学、民族精神医学の影響を受けて、精神医学理論は文化的感受性を一層発展させてきた。この進化する見方においては、霊媒やトランスは、その実践者(たとえば家父長制文化に支配された女性)に権限を与える技術であったり、不安・憂鬱・その他の悩みに苦しんでいる共同体の仲間への支援なのかもしれない。しかしながら、現代神経科学は、脳内の化学的・電磁的事象のダイナミックな仕組みに焦点を当てて、非常に普遍的かつ挑戦的なヒトの体験を説明しようとする。トランス(解離や没頭を含む)の生理心理学の観点からは、催眠的な手続きや儀式で霊媒が通常の自己の状態を異化・解離させるという霊媒実践能力では、自己の体験の解離の能力の方が没頭よりも重要な役割を果たすかもしれない。ハーゲマン博士らや他の研究を基に、生理心理学、心理学、神経科学研究の側面から、ブラジルにおける霊媒体験・トランス体験の意味合いを検討する。

P02 - fNIRSを用いた脳血流測定と様々な精神活動

要旨

近赤外分光血流計(fNIRS)は、脳活動を測定する非侵襲的測定法の1つであり、ESPなどの感受性の高い被験者や、ある種の運動を測定するのに有用と考えられる。本論文では、著者の行った太極拳、瞑想的体脱体験(OBE)、透視、金属曲げの研究のうち、fNIRSの測定結果に焦点を絞って検討する。太極拳では前頭前野で脳血流が増加したのに対し、瞑想的体脱体験では減少が起こった。推測課題(透視課題)では、サイキック・ヒーラーの前頭極で血流増加があったが、他の被験者は異なっていた。普通の人は透視課題中に図形イメージを形成すると思われ、側頭葉で血流が増加する傾向があった。また、サイ・テック社の技法を使った遠隔透視は、生まれつきの透視能力者の行う透視とはメカニズムが異なっていることが示唆された。馬鹿力で曲げる金属曲げ課題では、脳血流は前頭極で顕著に増加した。ある種の軽作業は、サイに関連すると思われる重要な領域の脳血流を増加させることが示唆された。

キーワード: 近赤外分光血流計、fNIRS、脳血流、太極拳、瞑想、体脱体験、OBE、推測、透視、遠隔透視、金属曲げ、前頭極、側頭葉



P03 - サイの神経生物学の可能性と松果腺

要旨

これまでずっと松果腺はサイ能力と関連付けられてきた。頭の中心部にあるこの神秘的な松果体にサイ能力が集中しているとする考えが、近年、増えてきている。ヨガの古典は、サイの命令中枢と考えられるエーテル体の1つ、アジュニャー・チャクラに言及している。ヨガの教えによれば、瞑想やヨガによって、あるいは何かのきっかけでこのチャクラが目覚めると、シディと呼ばれるサイの力が刺激される。アジュニャー・チャクラは、エーテル的には頭の中心に位置し、ヨガ行者によってはアジュニャー・チャクラに対応する肉体部が松果腺であると考えている (たとえばSatyananda, 1972)。ある総説論文では、瞑想は確かにサイと関係するかもしれないと述べている (Luke, in press-a)。

さらに、我々は松果腺が日夜多くの化学物質を作り出すことを見出している。たとえば、夜作られるメラトニン (Axelrod, 1970) は睡眠の始まりに関連するし (Dawson & Encel, 2007)、夢見を促す (Callaway, 1988) と推定されているピノリン、そして幻覚や神秘的な状態を引き起こすN,N-ジメチルトリプタミン (単にDMTともいう) もある。ただし、今のところ、これらの物質は松果腺で作られると仮定されているだけである (Strassman, 2001)。ESPの偶発事例の33~68パーセントが睡眠や夢見に関連していることや (Van de Castle, 1977)、実験室での自由応答型夢ESP研究が全体として肯定的な結果を示す傾向にあることから (Sherwood & Roe, 2003)、サイを仲立ちすると想定される、これら化学物質の重要性は増している。夜間に松果腺で作られると推定される化学物質群は、アマゾンのジャングルの幻覚煎じ汁 (アヤワスカ) 中の化学物質が起こす作用と類似の作用も引き起こす (Luke & Friedman, 2010)。この飲み物は超常的な現象、特に心靈治療と透視が可能な状態を誘導するために、伝統的にシャーマンが使っている。飲み物に含まれているアルカロイドは、かつてテレパシと命名されたことすらある (Beyer, 2009)。最終的に、松果腺とその生産物であるメラトニンは、地磁気変動が大きいときはメラトニンの生産が減少することから、地磁気変動との関連性が示された (たとえばBurch, Reif & Yost, 2008)。同様に、地磁気活動 (GMA) はESPとも結びつきがあり、複数の研究が地磁気活動とESPとが負相関することを示している (たとえばKrippner & Persinger, 1996)。何も影響がなかったという研究もあるが (たとえばPersinger, 1989)、それはファラデーケージで実験協力者を電磁的に (地磁気的にも) 遮蔽したせいかもしれない。とはいえ、少なくともある研究では、正相関と負相関が混在した結果を示している (Radin, 1994)。サイにおける松果腺の神経生物学的活動とその役割についての理論は、長年にわたって検討されてきた (たとえば, Miller, 1978; Sinel, 1927)。もっとも、瞑想と松果腺の神経化学という点で最初に検討したのはロニーとドゥーガル (1986) である。後に彼らは地磁気活動の要素も追加した (Roney-Dougal, 1988)。ほぼ同時期に、パーシンジャー (1988a, 1988b) もサイに関連する地磁気活動が松果腺と関連するかもしれないと示唆したが、どちらかというピノリン生産よりもメラトニン生産によるものと思われた。とはいえ、これ以降、数多くの研究の進展があるので、本論文ではその発展の一部を概説する。

円卓会議 M1 - M3

M1 - 死後生存説：利点と難点

M1a - 死後生存に関連した超常的な主張のための心理学的仮説

超常的な主張に関する科学的研究の歴史は、もっともオーソドックスではない自然主義的な仮説に挑戦している、語りにおいて実りのあるものである。そのような主張のひとつは母斑であり、過去生とその過去生において発達したスキルの痕跡もしくは“記憶”として解釈される、突然のスキルの獲得 (芸術的な能力のような) に起源を発する母斑である。この類の現象 (リアルもしくは想像される現象) のための、可能な心理学的な動機を説明できる解釈については一切考えず、サイまたは超サイ仮説を考えるなら、それは、問題を効果的に明確にするよりも、よりパラダイム的な抵抗、理論的困難をつくるようにみえる。心理学的メカニズムの理解を促す、これらの現象に関する理論的モデルは、自己知覚と自己の識別に基づきうる。どちらも個人のアイデンティティの形成にとって基本である。もし、個人がアイデンティティ形成の発達過程にあるとき、その人は生理学的、心理学的な特性と、他者を認識するサインを探し求める。このような検索は、サイを介したアイデンティティ形成の類の一部となりうると思われる。この仮説によって我々は、個人の願望、本人が住む社会的環境に起源を発する欲望を支持するだろうエレメント (人やモノ、状況) を見つけうるのかを、理解できる。ここで、この問題が逆転する：母斑は証拠を表すのではなく、被験者の自己構成の思考と明確にすべきで、 sui

generis (しるし) のようななにかを認識することによって始まるプロセスの開始をあらわす。もし、こうした仮説が経験的に支持されうるならば、その種の経験を報告する個人は、アイデンティティ形成の主要なプロセスを経ているだろうと認識できるはずである。過去生の記憶を主張する多くの子どもたちを説明できるのである、—そうした経験を持つ子どもたちにかぎらない。母斑は暗黙的に (あからさまなときでさえ)、彼らの起源に対する疑問を表現し、検索対象は文化的文脈によってフォーマットされる。しかしながら、母斑はそれらが過程を刺激しうるにもかかわらず、必要ではない。客観的な要素に乏しいときでさえ、過去生の記憶の主張と同じタイプであると認識できる。それでもこの仮説が支持されうるなら、靈魂の生まれ変わり文化に属する人は誰でも、アイデンティティ発達過程における、サイを介したエレメントを具現化できるのである。ひとたびアイデンティティが確立されれば、社会過程の結果としてではなく、超心理過程の結果と考えられよう。これは過去生の記憶が消失する理由の一つであろう。さらなる理論的発展、経験的支持が必要であり、それによって、もしわれわれが専門文学において発見されるデータを考えると、もっともらしくみえるものでさえも、サイの媒介仮説が例証されるのである。



M1b - 死後生存研究におけるアイデンティティの問題

死後生存の研究は、究極的には、我々が人々を評価する方法に深く関連している。一般的に、このフィールドの研究者は、我々が日常活動をおこなううえで他者を特定する際の、理にかなった前分析的な能力を使うことが、誰かを特定するのに十分な基準と考える。この点を考えるにあたってこれまで言われてきたことは、研究者は、個人や、特定の個人によって取られた書類やノートについて、心理学的術語では比較的疑わしいところになるのだが、親戚はそれを認識しなければならないという立場を信用することであり、なぜなら我々は、人々がいかにしてお互いと彼ら自身を驚かせ、だますのかを知っているからである。

これらの調査は特性・性格・意識的性格の記憶を強調する一方で、個人と全人格を形成する彼らの周囲にいる他者については、そうでなかった。死後生存仮説は意味のある一貫性と個人のアイデンティティにおける安定性を想定（あるいは必要と）するように見え、その一方で、心理学研究が示唆してきたのは、アイデンティティは本当に、ダイナミックで、手続き的で文脈的なものとするということである。これまでの研究から、神経生理学過程が、アイデンティティの形成と維持に、基本的な役割を發揮することが示され、もちろん我々は、そうした影響の拡張に疑問を持つことはできるのだが。

身体の構造と支持に役立つ身体的過程なしに、そして、それを可能にする文脈的条件と心理社会的要因なしには、どのようにして個人が死後生存するかを説明するのが難しい。心に対する二次的な“乗り物”、“霊体”に関する科学的証拠はまだ非常に不確かなところである。精神病理学の研究と、解離現象の研究によれば、ある様相や特徴が、構造レベルにおいて、依然として相対的にアクティブであるとしても、価値観、信条、行動のスタイルを含む以前の状況に比較されるなら、ある状況下におけるアイデンティティは、急激に変容、寸断され、認識不可能になるかもしれない、と示唆されている。

おそらく死後生存研究は個人の観念を洗練しなければならない。ある媒介物となる証拠が、明らかに死去した人に属する超常的行動や記憶を再現するような可能性を指摘するけれども、上記の特定された矛盾が解決されないなら、死後生存研究は何が本当に死後生存で、人がどのようにして死後生存するかをあらわにする、次なる段階へ進むことができないのである。

M1c - 不朽の仮説

ひとつの恒久仮説：我々が死後生存するという仮説は、はるか昔からのヒューマニティを伴う。このような仮説は、我々の死すべき運命が発見されるときに、ヒューマニティの始まりにおいて定式化される。死後生存説は、異なる時代、多様な人間社会と、様々な文化的、知的な環境を超えており、そしてもし人間の知識に関するよりよくつくられた別のものは、相対的にもしくは明らかに相容れないラディカルな仮説と考えられているのなら、それは21世紀に達してもなお“手つかず”のままなのである。死後生存説の起源が吟味され、一般的な性質、その特定の特徴、そして証拠の源はもちろん吟味される。これらの検討には研究ラインを調査しうるパラダイム、本来的な概念的挑戦、現在有力な科学的理論への接続、現在と未来における研究への展望などが含まれている。我々は死後生存説とその研究の科学的な妥当性のために、そして人間と社会にとってこの種の調査の人間的社会的重要性のために、結論する。しかしながら、我々が強調するのは、大きな概念的、そして方法論的な挑戦であり、人間社会に関する心理社会的、政治の様相に絡み合うフィールド調査の責任を負うことを、研究者たちが決めるときに、科学者が持っていない必要の極端な必要性、なのである。

M2 - サイ研究と神経科学

M2a - サイ研究と神経科学

人間によって解かれるべき最も重要な問題は4つある。(1)死後生存する人間の性格には何かあるのか？、(2)物理的相互作用の真の性質は何か？、(3)不活性物質を生物にする段階とは何か、(4)生物が意識を獲得する段階とは何か、である。このVIサイ会議において提示される論文は、「人間の皮質における弱い意図的磁場の使用」と題される。この部位で、いわゆる「神ヘルメット」が、8人のボランティアの神秘的な経験を誘発させるために使用される。Michael

Persinger博士によっておこなわれた実験の追試の試みである。故に、これは神経科学的な調査である。もうひとつの言及すべき調査は、Andrew

Newberg博士と彼の同僚による、陽電子（ポジトロン）放出断層撮影を使った調査である。Newberg博士が気づいたのは、患者の撮影画像について、彼らが深い瞑想と祈りの間に神秘的な体験をする前と後との画像は、明らかに違っていることであった。神経科学の領域における研究がはっきりと貢献しうるのは、(a)意識の性質をより理解すること、(b)ヒーリングの進んだ技術をつくること、(c)精神医学と心理学の問題の手がかりのための新しい医療をつくること (d)新しい、洗練された

意識の調査のための装備をつくること、(e)意識の性質、新しいラインの出現、(f)医療、物理、臨床心理、脳科学、生物学、そして、特に神経科学(*)の領域における新しい職業の出現、(g)生命の性質や人間について我々が持つ概念の広範な変化、(h)物質と宇宙、そして魂について我々が持つ概念の広範な変化、(i)対人関係の広範な変化、(j)小学校から大学への全てのカリキュラムにおける大きな変化、(k) (個人的かつ社会的な) 人間行動の大きな変化、(l)生き物の平和と幸福への貢献、(m)人間の倫理的感覚の増進、である。これらの理由のために、より多くの研究がこの心的科学において、特に神経科学においてなされると示唆される。研究は私学及び公立の大学において実施されなければならない。良いプロジェクトは、学際的なチームによる総合的な方法によって、計画され発展するべきであろう。

(*)人間の皮質における弱い意図的の応用磁場フィールドを持つ他の研究者は、Pehr Granqvist, M. Fredrikson, A. Hagenfeldt, S. Valind, D. Larhammar e outros (Granqvist, Pehr; Fredrikson, M; Ha-Genfeldt, P.; Valind, S.; Larhammar, D.ら(2005)である。彼らはPersingerの検証には疑問を持っている。



M2b - 意思決定、推論、感情、及びサイ

四旬節州：かくにも我々の行為と思考は、いつも感情によって創られ、影響を受けているものだ。平均的な眼窩の前前頭皮質の部分的損傷、または扁桃の損傷もしくは疾患（恐怖に関連する）を持つ患者は、自らの感情過程における損失を示し、合理的で有利な決定ができないことを示した。これらの臨床的観察が示唆するのは、彼らの線条と視床の結合はもちろん、扁桃や前前頭皮質は、感情過程に含まれるのみならず、意思決定にとって本質的な合理的思考と考えられるものにおいて、複雑な神経処理に参加していることなのである。Damásioによれば、推論を実行するには記憶が必要で、これは身体指標と関連しており、すなわち、思考パターンと行動、及びそれらの生理的な特徴はそれらが記録されたときに、生成される。これらの指標はある情報に関連した否定的な感情があるとき、特に重要である：それらは依然として、推論の使用に特徴づけられる意思決定の過程において決定的なのである。したがって、身体は意思決定の前に感情的に反応し、過去の経験に基づく傾向を示す。感情は処理をポジティブに助けることもあれば、処理に否定的に働くことや、それほど好ましくない傾向を示すこともある。しかし、我々の身体は未来の出来事に反応しうるのだろうか（ここでの未来の出来事は、推論されないものであり、現在一過去データに基づく反応から得られる結果でもない）。予感効果の研究では、落ち着いた画像と感情を喚起する画像が複数、被験者に無作為提示され、被験者の生理指標が測定された（皮膚電位や心拍など）。結果は、感情的な刺激が提示される5秒前に被験者の皮膚電位活動が上がり、将来を予知していることが示された。なお、落ち着いた画像刺激ではこの結果は得られていない。被験者はどの画像が現れるかは知らず、これは予感効果が広く無意識的であるということを示す。先行する有機的反応は、ある感情、感覚、直観や第六感に関連したフィーリングの基礎であり、これらの経験は、Damásioによって提唱された身体指標と一緒に、意思決定に影響を及ぼすと考える研究者もいる。Biermanは、Damásioによっておこなわれた3つの心理生理学的研究を紹介し、予感効果を示す超常現象を探し、それは3つの研究の結果の組み合わせにおいて発見された。これらの研究や他の研究によると、感情に関連する古い脳領域はサイ現象に関連するとされる。感情とサイの相関は、サイに関するフィールド研究や実験研究からも支持されている。もし、感情が意思決定の基礎であり、サイ現象にも関連するのであれば、これらの2つのカテゴリーは影響しあう関係にあるのだろうか。すなわち、サイ現象は人間の意思決定に関与しうるのだろうか。もしそうだとすれば、サイと意志決定にとって意味するのはなんだろうか。

M3 - 人の体験の多様性

M3a - 超心理学の横・上・向こう側：サイはどこへ行ったか

たいていの心理学的研究よりも、超心理学実験的研究は、感覚漏えい、実験者の影響、意図しないパターン化、詐術やその他の無関係な変数の影響を防ぐことに厳しい。そういった厳密な手続きは、すべての要因が取り除かれたとき、残っているのはほぼ確実にサイに違いないことを意味する。不幸にして、しばしば何も残っていなかったり、予想もしなかった、もっと悪くて重大な影響が見つかる。さらに、超心理学的要因のみを切り出す研究をすると、本当にサイのように見えるものは切り出された現象の薄いスライスの周りに染み出してしまおうに思われる。そういう場合、話はすごいが証拠力は今ひとつになってしまう。ここでは、データ取得が妨げられたとき（データがどこかに行ってしまったとき）に起こる「実験外サイ」について探究的な話を。また、測定が行われないときにだけ起こる、測定対象外として記録される出来事とはどんな出来事なのかを、筆者の調査記録から紹介する。実験・仮説・手続きというものに適していないサイについて検討する。また、トリックスターの元型（ともかくその場にそういうものがあるように思われる）が実際に現象を引き起こすのに必要なのか？を考えてみる。

M3b - 我々はなぜ日常生活の特異体験を研究すべきなのか？

すべての文化圏で特異体験の報告がある。しかし、「特異的」ということが、現在の科学の主流に（まだ）そぐわないのはどういう点なのかが、よく理解できていない。「特異的であること」は必ずしも「病的である」ことを意味しない。特異体験のうち、特に注目されるのは、サイ関連体験、過去生体験、臨死体験、特異的ヒーリング体験、幻覚体験、神秘体験、宇宙人による誘拐体験、共感覚、明晰夢である。カルデナ、リン、クリップナー編（2000）の『特異体験：科学的証拠の検証』で編著者は、特異体験は単に風変わりというだけでなく、特異体験は社会的関係性に影響を与えると同時に社会的関係性からも影響を受ける、また、特異体験の豊富な知見によって「特異的であること」と「病的であること」の違いも識別できるようになるだろう、と強調している。この結論は、2009年にサンパウロ大学で行われた「日常生活における特異体験：超感覚運動体験と主観的健康・態度・信念との連合」という博士課程研究の契機となった（Machado, 2009）。この研究は特にサイ関連体験（超感覚的あるいは念力的なもの）に焦点を当てたものである。306人のボランティア（大学生、労働者、グランデ・サンパウロの勤務者・研究者）の主観的健康について調査研究した結果、そういった体験の流行が社会的な事柄と関連していることが確認された。サイ体験と主観的健康・態度・信念のレベルとの連合も調査され、非体験者のデータと比較された。この種の研究や補完的な研究で達成可能な重要な目標は、(a) 特異体験を体験した患者・相談者に専門家としてどのように対処すべきなのか、心理学者や他の医療従事者の無知や偏見を減らすのに役立つこと。(b) 特異体験者に、特異体験が人生に与えた衝撃を受け入れることを学ばせるといった支援ができるよう、医療従事者に必要な情報を提供すること、である。



M3c - 精神修養と特異的・超常的出来事の発生との間の2つの方向性

ハーゲマン博士の研究は、これまでに行われたクリップナーら、ペカラら、その他の特異・超常現象研究から導かれた仮定（解離体験が特異現象や超常現象の発生に非常に影響すること、精神修養と瞑想の技法が特異・超常現象の発生において信念・能力・超常現象に対する恐れ・その現象の利用に貢献すること）に信頼性を与えるために行われている。ハーゲマン博士は、韓国人の道教群（ $n = 147$ ）と米国在住の密教群（ $n = 293$ ）という異文化集団において、変化のない群（ $N = 439$ ）の比較を行った。両群は、催眠体質（意識目録の現象学－催眠導入手続き、解離（解離体験尺度）、特異体験（特異体験目録）、精神的行動（サイコマトリックス・スピリチュアリティ目録））で評価された。催眠対知ると解離は特異体験を予見させたが、解離だけが両群で際立っていた。米国の密教群は、恐怖要因以外のすべての要因で、韓国人群よりも際立って高い値を示した。これらの発見は、特異現象あるいは超常現象の発生と精神修養との間に2つの方向性があることを示唆する。帰結的意味の検討を行う。